

最蓮房あて御書の一考察

中 條 暁 秀

一 はじめに

日蓮の遺文には、法然の念仏及び慈覚・智証等の台密学説に対する破折は頗る多いが、中古天台義に言及された遺文は比較的少ない。と同時に、中古天台義に言及された遺文は、いかなる理由によるものであろうか、最蓮房に送られた遺文に多くあらわれている。外にもないわけではないが、主要なものは最蓮房あて御書によつて占められているといつても過言ではない。

なお拙稿は、最蓮房あて御書中、身延山久遠寺に蔵され、身延三世日進の写本が現存する『立正観抄』について述べる。

二 最蓮房の伝

最蓮房は京都に生まれ、十七才で出家、天台の学僧で、生来病弱にもかかわらず極めて道念堅固の人であつたという。日蓮より先に何らかの原因で佐渡に配流になつていたやうで

ある。その佐渡で日蓮に値遇して弟子となり、日浄と法号をいただき、日蓮が文永十一年春赦免の後、翌建治元年に赦されて、京都あるいは身延に帰つたものという。

周知のように、明確な史料が少ないため、諸説入り雑じつて未詳の部分が多い。よつて、古来から架空の人物、あるいは、実在の人と論義の喧しかつたところであるが、立正大学名誉教授影山堯雄先生の『大崎学報』九八号・『日蓮宗布教の研究』、立正大学教授宮崎英修先生の『不受不施派の源流と展開』、『日蓮宗の祈禱法』中において指摘されるごとく、実在の人物であることは間違いないところである。

三 最蓮房あて御書十二篇

定遺にしたがつて、明らかに最蓮房あて御書と認められるものを摘出してみると、次の通りである。

- (1) 生死一大事血脈抄（文永九、二、一一）
- (2) 草木成仏口決（文永九、二、二〇）
- (3) 最蓮房御返事（文永九、四、一三）
- (4)

得受職人功德法門抄（文永九、四、一五）（5）祈禱經送状（文永一〇、正、二八）（6）諸法実相抄（文永一〇、五、一七）（7）当体義抄（文永一〇）（8）当体義抄送状（文永一〇）（9）立正觀抄（文永一一）（10）立正觀抄送状（文永一二、二、二八）（11）当体蓮華抄（弘安三、八、一一）（12）十八円満抄（弘安三、一一、三）

右の十二篇中、(1)・(2)・(3)・(5)・(6)・(8)・(10)・(12)の八篇は、卷末乃至末文によつて、(7)と(9)はいずれもその送状から、最蓮房あてのものであることが明らかである。また、(4)は(12)との関連によつて、(11)はその抄末と(12)の末文との関係によつて、最蓮房あてのものであることを知る。

そして、真に奇異に思われることは、上記十二篇中真蹟の現存・曾存というものは一篇だになく、ただ『立正觀抄』・『同送状』に日進の写本が、及び『祈禱經送状』に日像の抄写本があるのみである。さらに他の門弟檀越に比して、短期間に相当量の遺文が集中しているということも注目される。

加えて、本来ならば、遺文の真偽問題についても論じなければならぬのであろうが、今その問題を棚上げしていえば、最蓮房あて御書は、その題名を見ただけでも血脈・口決・当体蓮華・十八円満など、中古天台義が濃厚にあらわれていることを知る。なぜ中古天台義が色濃くあらわれるのであろうか。恐らく天台の学僧であつた最蓮房は、当時の比叡山の教

学について様々な質問を發し、それに対して日蓮は、相手の教養等に照らして、相手の理解を得やすいような文辭を以て、回答を与えられたためであろう。

四 日進と日祐

身延山久遠寺には、『立正觀抄』・『同送状』の最古の写本が三世日進のものとして蔵されている。（なお『送状』については省く。）その写本の奥書には「正中二年_丑三月於洛中三条京極寂蓮房之本御自筆有人書之今于時正中二年_丑十二月廿日書写之也 身延山_{元徳二庚午卯月中旬}重写也」（傍線筆者）とある。この文は意味の通ぜぬところがある。それは傍線の部分に問題があると思う。すなわち、①日蓮自筆の立正觀抄を最蓮房が所持していた。②最蓮房所持の立正觀抄は、最蓮房が日蓮自筆のものを書写したものである。③立正觀抄は最蓮房の自著である。との解釈が可能となるが、常識的には②の意として解するのが妥当であろう。そして、この奥書を惚_ぼけさせるものは

「有人書之」の表現であろう。折角のものに曖昧さが残る。

とはいえ、日蓮滅後四十四年の正中二年・四十九年後の元徳二年に、日進が『立正觀抄』を書写したことは間違いないところである。としてみると、若干_手の疑問が生じる。その疑問とは、まず日進は中山三世日祐と年令差を超えた親密な関係にあつたことは周知の通りである。にもかかわらず、日祐

の『本尊聖教録』に『立正観抄』・『同送状』の記載がないということは誠に不思議である。さらに日祐の『善根記』へ身延山参詣事Vによると、日祐は正和三年の日蓮三十三回忌を期して、ほぼ毎年身延山に参詣している。また、『同記』へ精舍勧進造営結縁事Vによると、日祐は中山本妙寺の造立供養（正中三年）・法華寺の開堂供養（元徳二年）に日進を招待して、唱導の師と仰いで親しく見えていたことを伺うのである。このような特別且つ友好的な関係を保持していたにもかかわらず、日祐の目録記録類に何ら記されていないことも解せぬところである。それとも、日進は秘して日祐に見せなかつたものであろうか。その上、『同記』へ京上^{キョウト}四ヶ度Vによると、日祐は四度（①文保元年二月一九日、②正中元年四月、③建武元年七月四日、④暦応三年一〇月三日）京へ赴いている。しかも、二度目の正中元年の上洛の時は「為^レ聖教書写」と記されている。かかる時、今問題となる『立正観抄』を見落すということも何か妙な感じがする。

五 立正観抄の検討

故立正大学教授浅井要麟先生の祖書学の特色は遺文の真偽論にあるが、その一つに「祖書の思想的研究」（『日蓮聖人教學の研究』所収）がある。その中に、中古天台義から脱却しようとした日蓮の遺文中に中古天台義、しかも、日蓮滅後の中

古天台義がありうる道理がないという理由によつて、中古天台義に与同的な遺文を偽撰として排除しようとする試みがある。この試論は、夾雑物を除去して純粹日蓮義を樹立するための一つの貴い作業であつたと思うが、思想内容に検討を加えることによつて、真偽を判定する方法は、余りにも冒險すぎるのではないかと案ぜられる。

『立正観抄』を一つの例としていえば、浅井要麟先生は、止観勝法華の説は、日蓮より三十一才後輩の仙波の尊海がたてたものであるから、日蓮の時代にはなかつた思想であるとして、これを以て本書偽書説を主張する一根拠とされている。しかし、かかる思想は、慧心流の本迹末分の観心の思想を一步進めれば、そうなる性質のものであるから、日蓮の時代に既に止観勝法華の説は成立していたと見て差し支えないと思うのである。

ところで、これらを踏まえて、一つの試みであるが、『立正観抄』の中には幸い経論釈が縦横に引用されている。よつて、今は経論釈の引用の一点に焦点を絞つて、本書を検討してみようと思う。なぜなら、日蓮の教學の特色の一つは、充分に吟味された経論釈を引用して、自説の援証とする文証主義が極めて旺盛であるからである。

まず引用経論釈の典拠を丹念に検する。本来ならば、ここで本書中の引用経論釈について、その出典を含め、具さに検

討・対照すべきであろうが、紙巾の都合で省く。ただし、本書中に引用される経論釈の出典名のみを記すと、『法華経』（方便品）、『涅槃経』、『十住毘婆沙論』、『蘇悉地経疏』、『文句』、『玄義』、『止観』、『止観大意』、『弘決』、『学天台宗法門大意』、『守護国界章』、『顕戒論』、『法華秀句』等の典籍が挙げられる。そして、これらの引用経論釈の出典等が確認できるものは、一応首肯してもいいと思うが、その確認のできないものが幾つかある。その主たるものを挙げ検討すると、(a)慈覚大師・釈云、三観^ト者^ハ爲^シ令^メ得^ル法体^ヲ修観^ス也云云。』（定遺八四七頁）現存する円仁著作中からは発見できない。遺文注釈家の詮索によると、恐らく檀那流の『一心三観記』という台家秘本切紙中からの引用であろうという。現に、切紙を成文化した覚運の『一心三観記』と称されるものの中にある。(b)「此書（灌頂玄旨血脉）云、一言妙旨一教玄義文。」（定遺八四九頁）最連房あて御書の一つで、定遺三卷所収の『十八円満抄』に全同の文がある。（なお『灌頂玄旨血脉』は、切紙が成文化された『天台灌頂玄旨』を指すようである。）(c)「夫尋^レ天台観法^ヲ者^ハ於^テ大蘇道場^ニ三昧開発^ス己来^ニ開^レ目思^ヘ三妙法^ヲ隨縁^ニ真如也。閉^レ目思^ヘ三妙法^ヲ不變真如也。此兩種^ノ真如^ハ只一言^ノ妙法^ヲ有^ル。我唱^ル三妙法^ヲ時万法茲達^ス一代修多羅含^ニ一言^ノ。」（定遺八五〇（一頁））日蓮は偽撰書『成仏法華肝心口伝身造抄』、『説誦法華用心抄』、『万法一如抄』、『御講聞書』、『御義口伝』では、真如

隨縁論による本門釈を散説するが、真撰書では全く説かれぬとともに、真如隨縁論そのものが存在しない。周知のように、日蓮は最澄を根本大師と仰ぎ多大の法門を吸収された。その日蓮に最澄が尊重し活用した真如隨縁論が見られぬということは、真に不思議な現象である。思うに、それは日蓮にとつて真如隨縁論は別教所詮であると考へ、天台法華宗の元来からの教学ではないと判断された結果ではなからうか。すると、本書中に真如隨縁論があるということはいかように解すべきであろうか。

六 むすび

(1) 日進と日祐の親密な関係を考える時、日祐の目録・記録類に『立正観抄』のことが片鱗だにないということは、素朴な見方からすれば、理解に苦しまざるをえない。

(2) 『立正観抄』の写本は、日進の筆であることは間違いない。とすると、指摘した引用経論釈に曖昧さの残る個所は、いかように解すべきであろうか。

との問題点が、現在の日進の写本の段階にはある。

なお注は紙数が許されないので省略するが、詳細は身延山短期大学の『棲神』五三号の拙稿を参照されたい。

（身延山短期大学講師）